

資産運用 「きほん」の「き」

■さまざまな相場格言と名言

洋の東西を問わず、相場に関する格言はたくさんあります。特に日本は江戸時代から米相場の伝統があり、相場に関する先人たちの知恵が凝縮されたような言葉がたくさん残っています。それらのなかで、どのような環境や時代でも通用すると思われるものを紹介しましょう。

投資で成功する最大のコツは、常に大多数の人と逆のことをするということです。みんなが強気になるほど、自分は弱気になる。みんなが弱気になるほど、自分は強気になる。その点を強調した格言としては次のようなものがあります。

「人の行く裏に道あり花の山」
(一説に千利休の言葉といわれる)

「野も山もみないちめに弱気なら、
あほうになりて米を買うべし」(三猿金泉秘録)
「麦わら帽子は冬に買え」(ウォール街の格言)

投資家の心理を的確にとらえた格言も多々あります。

「もうはまだなり、まだはもうなり」
(宗久翁秘録にある言葉)

「買いにくい相場は高い、買いやすい相場は安い」
(日本の格言)

「腹立ち売り、腹立ち買い、決してすべからず」
(宗久翁秘録)

「相場は群集心理の産物である」
(メイナード・ケインズ)



岡本 和久【編集委員】

CFA協会認定証券アナリスト
I-Oウェルズ・アドバイザーズ㈱
代表取締役
日本CFA協会名誉会長

「マーケットは最大多数の参加者にとって
もっとも都合の悪いことが起こる場所である」
(私がウォール街の古老から聞いた話)

投資戦略に関連した格言もたくさんあります。
「卵をひとつのかごに盛るな」(ウォール街の格言)
分散投資を説く有名な格言です。私に言わせれば、
かごを分散するだけでなく、かごを置いておく棚も
分散すべきです。これは、100年に一度の暴落のレッ
スンであると言ってもいいでしょう。

「相場は暴落によって若返る」(日本の相場格言)
大暴落の後に続く相場は普通、それまでと大きく
性格が異なります。

「いのち金には手をつけるな」(日本の相場格言)
要するにサテライト・ポートフォリオで損をして
も、それをコア・ポートフォリオで補うようなこと
をしてはだめですよということ。

株価の動きに関する格言です。

「山高ければ谷深し」(日本の相場格言)
もちろん、逆も真なりで、谷が深ければ山も高い
のです。

「閑散に売りなし」(日本の格言)
相場の低迷が続き、人氣が離散。悪材料ばかりで
好材料が見当たらない。そんなときは売りが出尽く
した状態で、陰の極といえる。

「半値八掛け二割引」

1000円の株価なら320円が暴落時の下値メド。要
するに3分の1。



米相場の極意を書いた三猿金泉秘録(牛田権三郎)という本に次のような文があります。

「三猿とは見猿、聞猿、言猿の三つなり。眼に強変を見て、心に強変の淵に沈むことなかれ。ただ、心に売りを含むべし。耳に弱変を聞きて、心に弱変の淵に沈むなかれ、ただ、心に買いを含むべし。強変を見、聞くとも人に語ることなかれ、言えば人の心迷わす。これ三猿の秘密なり」

株価の動きに目を奪われないこと、周りのニュースにとらわれず超然としていること。そして、相場について語らない。本当に相場を知っている人は、その怖さを嫌というほど知っている。だから、得意になって相場を語るようなことをしないものです。

格言ではありませんが、偉大な投資家たちも相場の動きと心理にフォーカスを当てて名言を残しています。そのなかでも一番有名なのが、ジョン・M・テンプレトン^{きょう}卿の以下の言葉です。

「強気相場は悲観のなかで生まれ、懐疑のなかで育ち、楽観とともに成熟し、幸福のうちに消えていく」

テンプレトン卿はそのほかにもたくさんの名言を残しています。

「悲観論が最大になったときが最良の買い場、楽観論が最大になったときが最良の売り場」

「株式市場でバーゲン株を買える唯一の方法は、多くの投資家が売っているときに買うことである」

「弱気市場は常に一時的だ。株価は景気循環の底入れに1~12ヵ月先行して上昇に転ずる」

「見通しやトレンドに注目している投資家は多数いる。それゆえ、価値に注目することが大きな利益を生む」

「祈りをもってははじめれば、思考も明晰^{せき}になり、不注意な間違いも少なくなる」

ピーター・リンチの名言。

「株価が半分に下がったぐらいで売ってしまうな

ら、売買などしない方がいい」

そして、今回の世界金融市場の混乱で、ウォーレン・バフェットがニューヨーク・タイムズ紙に寄せたこの言葉は有名になりました。

「皆が欲張りになっているときは恐怖心を持ち、皆が恐怖心を持っているときは欲張りになるのが投資のシンプルなルールである」

私は、日本では竹田和平さんの以下の言葉はとても含蓄が深いと思います。

「上がってよし、下がってよしの株価かな」
禅問答のテキスト、無門関に「非風非幡」という話が出ています。それを読んで本間宗久は相場の極意、「三位の伝」を悟ったといっています。

「非風非幡」というのはこんな話です。ある日、風で寺の幡^{はた}がそよいでいた。それを見て、ある僧は『幡が動いている』と言い、他は『風が動いている』と言い、二人は言い争いを始めました。二人は慧能禅師のもとに答えを聞きに行きます。禅師は『幡が動くのでもない、風が動くのでもない。動いているのはお前たちの心なのだ』と説いたといっています。

相場を動かすのは風(需給関係)だけでも幡(実体価値)だけでもない。それに心理が加わり三位が一体となって動いているのです。

そしてこんな格言もあります。

「金のなる木は水では生きぬ、汗をやらねば枯れてゆく」

投資をするにも少しは勉強や自律心が必要です。しかし、本当の経済的自立は、投資だけで実現するものではなく、汗水たらしてまじめに働くことで可能となるのです。

(『きほん』の「き」はI-Oウェルス・アドバイザーズのメルマガに掲載された文章を加筆修正したものです。メルマガ購読をご希望の方は住所、氏名、職業、電話、メールアドレスをご連絡ください)。